

楊逸の作品における在日中国人の異文化適応について——文化変容 を中心に

Strategies of Intercultural Adaptation for Zainichi Chūgokujin (Chinese resident in Japan): A study on Acculturation in the Novels of Yang Yi

曾 逸謙

香港中文大学ジェンダー学科

要旨

中国人の作家である楊逸は、2007年に「ワンちゃん」で作家デビューし、翌年「時が滲む朝」で芥川龍之介賞を受賞し、史上初受賞した外国人としてよく注目されている。しかし、デビューしてから3年、楊の文学に狙う研究はまだひとつもない。本稿はパイロット研究として、文化変容の枠組みのもとで、楊の作品における主人公の背景、言行と日本滞在の経験などを勘案し、楊の創作特色を考察した。その結果、日本での滞在時間を問わず、日本文化を受け入れない主人公の生活を描くという楊の創作特色が明らかになった。また、主人公の恋愛関係、移住者同士との関係、次世代との関係、三つの人間関係を扱い、他の人物とのやり取りを通して主人公が中国大陸に対する強い愛着を突出するのを解明した。

キーワード:

文化変容 在日中国人 異文化適応 人間関係 カルチャショック

楊逸の作品における在日中国人の異文化適応について——文化変容を中心に

曾 逸 謙

香港中文大学ジェンダー学科

1. はじめに

2008年、中国人である楊逸は、「時が滲む朝」で芥川龍之介賞を受賞し、史上初受賞した外国人として新しい歴史を作った。日本語以外の言語を母語とする作家では代表的な人物になり、芥川賞の七十四年の伝統を打ち破った人としてよく注目されている。作家の辻原登氏、浅田彰氏など、楊の作品を評したことがある。しかし、楊の文学に狙う学術研究はまだひとつもなく、十分でないと言える。中国人しか書けない在日経験の原因で注目されている楊の作品は、作家自身と同じ日本在住の中国人の生活ばかり描写し、毎日嘗めている中日の文化違いから起こるカルチャーショックや、異文化適応における差障りとストレスなど、在日中国人が日本社会に融合してみる努力を豊かに述べている。実際、在日中国人の人数がかなり多く、法務省の推移で2009年に68万人に上り、一番大きな規模である（法務省2009）。これは作品が描く浮世と総合して考えると、小説の人物を分析してみれば、日本に移住した中国人の生活を明らかにすることができるだろう。そこで、本稿はパイロット研究として、いままで（2010年10月現在）楊が執筆した『ワンちゃん』、『時が滲む朝』、『金魚生活』と『すき・やき』、四冊の文学作品における人物の背景、言行と日本滞在の経験を検討し、その価値観を研究し、楊の創作特色を考察してみたい。特に、文化変容という枠組みのもとで、親密な関係、移住者同士との関係、世代の違い、三種類の人間関係を分析し、楊の作品の世界を解読したいと思う。

2. 楊逸の略歴と作品のあらすじ

2.1 略歴

本稿が始まる前に、楊逸について少々話そう。史上初芥川賞を受賞した外国人として、楊逸（本名「劉菽」、1964年生まれ）は1987年に留学に日本に移住し、お茶の水女子大学文教育学部地理学専攻卒業後、在日中国人向けの新聞社に勤めていた（人民網2009）。2007年に、「ワンちゃん」で作家デビューし、同年、文学賞新人賞を受賞した。翌年「時が滲む朝」を出版し、初外国人として芥川賞を受賞した。その後、「金魚生活」と「すき・やき」二冊の作品を出版した。

2.2 あらすじ

「ワンちゃん」は『文学界』2007年12月号に発表され、文学界新人賞の受賞作である。中国人のワンちゃんは、前夫と離婚し、見合いで愛媛県の日本人と再婚した。それでも旦那との関係がうまく行かず、旦那の兄と姑を世話しながら独身男性を中国の農村に連れて行き、お見合いツアーを組みはじめた。姑が階段から転んで以来、容態が悪くなった。結局、姑が逝いてしまい、孤独感を感じたワンちゃんは姑の傍に泣いてきた。

「老処女」は「ワンちゃん」を単行本化するにあたって書き下ろした短編である。四十五歳を迎える万時嬉は、七年にも児童心理学の博士課程を修学したあげく博士号を取らず、また七年に大学の中国語講師になった老処女である。一生独身と決意したが、新しく入ってきた歴史学科の助教授に一目惚れした。親友の李蘭の助けで、自分の無愛想な顔を一新したところ、下腹部の痛みと不正出血、中国実家の両親に対する気遣いなど、四十五歳のうちにさまざまな不運が出てしまった。助教授の専門に合わせて元史の本を懸命に読み上げ、相手と昼食を一回したあと、助教授が出来ちゃった婚で再婚する噂が流れてきた。最後の望みと呼ばれた助教授と恋愛に陥る見込みを失い、時嬉が元史の本を捨てから虚脱状態に陥った。

「時が滲む朝」は『文学界』2008年6月号に発表され、同年第139回芥川賞を受賞した。前半は中国人大学生の梁浩遠と謝志強が中国を民主化させるために学生運動に参加したのを描いている。天安門事件の直後、学生運動を取り締まられ、同窓の友人もリーダーの先生も亡命した。後半では、日本へ亡命した梁浩遠の経歴を描き、民主化の志を貫くために民主同志会に参加しても、自分の生活を優先する中国人移住者同士の暮らし方と日本の世情を述べた。最後は海外へ亡命した先生と同窓の白英露が帰国する前に日本に一泊して久しぶりに再会した。

「金魚生活」は『文学界』2008年9月号に発表された。中国の東北部のレストランに勤めていた玉玲は、店長から金魚の世話を頼まれた。夫が亡くなり、亡夫の友の周彬に求愛されたが、回答しないまま曖昧な関係で六年にも同棲した。そのあと、日本に嫁いだ娘の出産のため、玉玲は来日したが、娘に日本人との再婚を勧められた。日本の生活をまだ慣れていないうえに、周彬のことを覚え出し、漢詩に興味を持つ見合いの相手に「チューゴク、キンギョ、キンギョウ、イマス」と言った。

「すき・やき」は『新潮』2009年6月号に発表され、初めて二十代の少女を主人公にする作品である。日本人と結婚した姉のおかげで、中国人留学生の虹智は高級牛鍋屋でアルバイトを始めた。居候させてくれた姉の婚活を見ている同時に、牛鍋屋で常連客と店長との交流によって、老若男女の人間模様を観察し、店長に好きな気持ちを持ってきた。一方、留学生仲間の韓国人の柳賢哲に猛攻勢をかけられ、店長と柳賢哲の間で迷った。

3. 文化変容

以上まとめたように、楊の作品には在日中国人を主人公にする物語が多く、離婚、未婚、亡命、永訣、恋煩いなど様々な辛酸を嘗めた人物が日本で生活している時のもがきを表現するのが共通点である。この共通点から、その辛酸は主人公の価値観の根柢を成している中国文化と滞在地の日本文化の衝突から惹起したということが見られる。異文化接触が引き起こした価値観や生活習慣などの変化を系統的に分析する「文化変容」(Acculturation) という概念があり、主人公の異文化適応を探る前にこの概念を簡単に紹介しておこう。「文化変容」はそもそも西洋の学者が提出したもので、先行研究が英語で書かれていたものが多い。その文献の日本語訳については、本章は木村(1997)のまとめを参照する。木村は文化変容の先駆的研究を日本語に訳し、この概念の発展の経緯を簡潔にまとめている。したがって本稿では、木村のまとめと筆者の補足を結合して文化変容の理論を略述する。

文化変容に関しては、Redfield et al. (1936) は次のように定義されている：「文化変容は、異なる文化を有する個人からなる集団が片方、あるいは両方の元の文化様式に対して継続的な接触を通じて変化を受ける現象を指す」(木村訳 1997)。さらに、文化変容が発生するのは二つの文化の間にしかないという誤解に対して、社会科学調査委員会 (Social Science Research Council, 1954) は、文化変容を「二つまたはそれ以上の独立的な文化システムの連結によって起こされた文化変化」と定義する(木村訳 1997)。要するに、文化変容は移住者が持っている自文化が異文化と接触するプロセスに指している。異文化との接触に対する移住者の反応は、文化変容の様式と称する。Berry (1970) は、移住者の自文化とアイデンティティの維持と異文化との関係により、統合、同化、分離、周縁化、四つの文化変容の様式を主張し、自文化を維持しながら異文化に適応すると「統合」、自文化を放棄して異文化に参加すると「同化」、自文化を維持して異文化を拒否すると「分離」、自文化からも異文化からも疎外すると「周縁化」、と概念化されている(木村 1997)。

異文化適応のストラテジーとして、村井(1995)は異文化間の相互理解が必要だと唱え、Shiun(2003)は、黒木(1996)が名づけた「自文化変容」という自文化再発見のプロセスを提唱している。村井は文化摩擦を「異なる文化をもつ人間同士の認知不一致によって引き起こされる」と認識し、その摩擦を解決したければお互いの「文化的背景、価値観、社会的規範など」を理解し合う必要があると述べている(1995:30, 52)。一方、「自文化変容」とは、異文化との接触から起こる自文化を理解しなおすことである(Shiun 2003)。異文化理解の過程では、自文化の価値観に規制される可能性があるため、異文化に対する「ステレオタイプ」という固定されたイメージが起りやすい(Shiun 2003)。この規制を自覚しながらステレオタイプに陥らず、客観的に異文化のルールを習うべき、最終的に異文化を受け入れつつ自文化も保てる「二重文化能力」(ネウストポニー 1982)を養成することが大切だと、Shiun は結論付けている(2003:107)。

さまざまな研究は、文化変容の成功に影響を与える要因を検討している。本稿は本研究に関する幾つの要因をまとめてみる。まず、異文化に適応するため、ホスト社会の言語の習熟度が必要な条件と Brien & David (1971) は提案し、後ほど B-L.C. Kim (1978) はホスト社会の言語習熟度とホスト社会におけるよい生活状態の密接な関係を肯定している (木村 1997)。そのうえ、親密な恋愛関係を皮切りに、親族や友人との接触、コミュニティへの参加など、心理的関心や物質的支援のサポートを提供できるソーシャルネットワークが広ければ広いほど、異文化適応がスムーズに行われる、と数多くの研究は指摘している (例えば、Walker et al. 1977; Gallo 1982; 木村 1997)。最後に、異文化適応の過程では、移住者の文化的価値も重要なファクターだと考えられている。この点については、次に談じるエスニックアイデンティティー (Phinney 2003) を用いて補足したい。エスニックアイデンティティーは、自分がエスニック集団の一人であるという移住者の自己意識を指している。しかし、この自己意識は、単一のものとは限らない。統合という文化変容様式、つまり自分の文化を保持しつつ異文化に適応する姿勢には、祖国の一員ならびに移住先の一員、両方のアイデンティティーを同時に認める二重アイデンティティー (Bicultural identity) が起こる場合がある (Phinney 2003:64)。勿論、二重アイデンティティーの成り立ちは、文化変容の成功に関わる。すなわち、二重アイデンティティーを成り立つのは、移住者が比較的に文化変容に成功したことを意味している。なお、二重アイデンティティーに対する意識は、世代によって違うことがある。Phinney によると、外国に移住した移住者の二重アイデンティティーを生み出す可能性が高くない一方、外国に生まれた移住者の子供には二重アイデンティティーの意識が生み出しやすい (2003:66)。

以下では、文化変容の枠組みを取り上げ、主人公の文化変容及び異文化適応を詳説する。

4. 主人公の文化変容の成敗の分析

楊の作品の主人公には一つの通有点がある。それは日本文化に適応できず、文化変容に成功した例が全くないということである。日本にいる時間が長いにせよ短いにせよ、滞在時間を問わず主人公は日本文化を受け入れない。受け入れないとはいうものの、また「受け入れられない」と「まだ受け入れていない」二種類に分けられる。「受け入れられない」というのは、主人公が中国文化に対する意識が強すぎて日本文化を受け入れることができず、つまり、「統合」か「同化」という文化変容様式が実現しがたいことである。「ワンちゃん」のワンちゃん、「老処女」の万時嬉、「時が滲む朝」の浩遠と「金魚生活」の玉玲はこのタイプである。「まだ受け入れていない」は、未だに日本文化を受け入れていないが、将来受け入れる可能性を指している。「すき・やき」の虹智はこのタイプである。いずれにしても、日本社会に完全に溶け込めない、あるいは溶け込めていない中国人を主人公に設定するのが楊の創作特色である。

次に、「恋愛と家族関係の寓意」、「移住者同士の役割」、「世代の違い」、三つの面からこの創作特色を探る。これらは全て人間関係に関するもので、以下で楊は他の人物に引き立て役をさせ、主人公が中国大陸に対する強い愛着を突出するという方向に沿って扱うことにする。

4.1 恋愛と家族関係の寓意

前述の如く、親密な関係は異文化適応の重要な一環である。国際結婚の場合、中国人の女性は日本人の男性と結婚したら、日本語を話せないまま一人で日本に移住するので、夫との関係がスムーズにいくと、順調に日本文化に適応できるのだろう。言い換えれば、親密な関係は文化変容の潤滑油である。親密な関係は文化変容に役に立てる原因は、コミュニケーションを通して周りの人とソーシャルネットワークを作り、地元の文化ルールや慣習を見習い、「ここは私の家だ」と思いながら地元と繋がることのできるからである。

楊の作品には、主人公の恋愛と結婚生活はよく描写されている。しかも「時が滲む朝」以外、相手はすべて日本人である。しかし、このような恋愛関係や婚姻は失敗ばかりである。以下で「すき・やき」、「老処女」、「ワンちゃん」と「金魚生活」の順番で恋愛と家族関係の役割を解明してみる。

「すき・やき」の虹智も玉玲のように二人の男性の間で悩んでいる。姉の紹介によって高級牛鍋店でアルバイトを始めたおかげで、虹智は日本の接待とサービスマナーやお客さんとのやり取りなど、日本社会のイメージを掴んできた。そのうちに、コミュニケーション専攻の彼女は、習ったコミュニケーション学の理論を活用して周りの両性関係を観察すればするほど、自分も恋愛をしたいという気持ちが出てきた。日本社会を学んでいる間に恋愛をしたいのは、恋愛が日本文化に融合できるかどうかのを表象するのではないだろうか。虹智は洗練された日本人の男と結婚すればいいと言ったことがある。この条件にふさわしい相手は、「畏まった振る舞いも、佇まいも、（「いらっしやいませ」と客を迎え入れるとき）腰を曲げた際に出る『っ』の絶妙な声の響き方にいたるまで、そんな洗練された」と形容されたバイト先の店長である（「すき」p.71）。一方、クラスメートの柳賢哲という韓国人は虹智が好きになり、何度も付き合おうと告白した。うわべは虹智は柳賢哲のことを「友達」と呼んだが、実は柳が気になることが多く、彼の告白をはっきり断ることもないほど曖昧であった。また、柳との繋がりがもう一つある。それは、二人がよく使っている間違いの日本語である。「晩ご飯は焼肉でしょお（でしよう）?」、「ジェンプ（ぜんぶ）食べる」など、二人が「使い慣れた変な日本語で楽しく喋り続ける」ことがある（「すき」p.38）。この意味では、外人訛りがある日本語は、店長でさえ妨げられない二人だけのコミュニケーション方法である。しかし、柳賢哲と付き合いと、虹智はチョコリという韓国の着物を着させられたり、韓国の焼肉やキムチなど食べさせられたり（「すき」p.37-39）、日本語の未熟さのように、日本文化に完全に適応する可能性が少なくなるかもしれない。

ここで難局が出てしまい、選択肢は店長と柳賢哲のいずれである。店長を選ぶと、日本の生活に慣れる可能性を指しているが、同じ外国人の柳賢哲も日本に留学しているから、柳を選ぶと一概に日本文化に適応できないと断言できず、まだ日本に適応できていないのに調整する。しかし、物語の結末で虹智の選択をはっきりさせなかった。たしかに、最後に虹智は店長のデートの誘いを受け取り、ディズニーランドに行くことにしたが、行く前夜に店長がもはや結婚したということを知ったところ、店長から渡されたデートの待ち合わせ場所を書いてあるメモを捨てようとして彷徨った後で冷静して考えると、

「あの礼儀正しい店長が、下心があって自分をディズニーランドに誘ったとは、やはり考えすぎかもしれない。紳士の店長に失礼じゃないか。(中略)男女が一緒に出かけると恋人ないしは男女関係だと思うのは単純すぎる」 (「すき」 pp. 150-151)

と反省したが、折角のディズニーランドに行く機会なので、「後は店長にあってコミュニケーションすれば、彼の考え方も分かってくるのだ」と(「すき」p. 152)、店長に恋をする可能性を考え直した。それから、これまでずっと姉や大学の友達に「韓国の男が男らしい」、「韓国人と結婚したほうがいいよ」と説得されたせいで(「すき」p. 99)、物語が終わる直前、柳から「ディズニーランド絶対、待ってくださいよ」と哀切な乞いに影響され、「心の底でにわかにな熱くなった一筋の波が打ち乱れた」ように動揺された(「すき」p. 154)。店長に対する恋愛の気持ちの考え直しと柳をはっきり拒絶しない行動が相まって、虹智が店長か柳賢哲か、どの人を選ぶのをまだ決まっていなかった状態を暗示するのではないか。前述の通り、いずれの場合でも、虹智の文化変容の成功に影響を与えるものと思われる。

「老処女」の万時嬉は、子供を生むどころか恋愛経験すらないまま、日本で児童心理学の博士課程を修学していた。しかし、七年も研究したあげく、結局指導教授に博士課程をやめるのを勧誘された。博士号を取れなく、ただ中国語の非常勤講師として勤めているに加え、学生に変な性格をしている老処女と呼ばれ、無愛想な顔をして友人も少なかった失敗ばかりの人生だった。毎日大学とアパートの往復で無味乾燥な生活をしていた彼女は、男性の魅力がある中年の助教授に魅せられたのは珍しくもないだろう。ところが、四十五歳の時嬉は、不正出血をはじめ、様々な不幸に遭った。「いやなことばかり起きる」と感じた彼女にとって、助教授に出会うことは不幸な四十五歳の「唯一の望み」である(「老」p. 143)。

しかし、別の見方をしてみると、助教授との恋愛は実は時嬉が文化変容に成功する最後のチャンスと見られる。来日して十四年間ずっと同じ場所を通っており、狭すぎる生活圏の中で李蘭と同僚

の山田先生のほかに友達がいないように見えている彼女は、日本に対する帰属意識が非常に弱いと言えるだろう。友達が少ないためソーシャルネットワークもできず、時嬉の文化変容の過程は成功する可能性が微かになってきている。逆に言うと、文化変容を成功させる方法は、恋愛など親密的な関係を作らざるを得ないのだろう。つまり、助教授との恋愛は時嬉の文化変容を成功させる最後の機会だというわけである。結末で助教授の再婚の噂を聞き、泣かずにはいられなかった彼女は、この文化変容の機会もなくしてしまったのを示している。

恋愛が文化変容の象徴と見なすという設計は、「ワンちゃん」のワンちゃんと「金魚生活」の玉玲にも当てはまる。更にこの二つの物語には、恋の失敗が主人公の中国に向かう心を表している。

ワンちゃんは逃げることばかりしていた。失敗した初婚から逃げるため、日本の四国に渡って再婚した。つまり一回目の結婚からの逃避は、皮肉にももう一回の結婚ということであった。二回目の結婚は、無口な旦那とインタラクションが全くなく、毎晩「食事、風呂を済ませると残りはテレビとの睨めっこだけ（中略）酸素の流れすら感じられないほど、窒息しそうな空気になってしまうのである」のような同じ日々を送り、夫婦二人きりで生活するのは「息苦しく感じるようになった」（「ワン」p.62）。また失敗した再婚から逃げるため、ワンちゃんは自分の祖国に向かった。毎晩実家に国際電話をしたうえ、日本の独身男向けのお見合いツアーを仕切りはじめた。自分の国際結婚は失敗になりつつも、日本の男性と中国の女性に国際結婚を勧めるのは風刺の極みではないか。ここで、旦那との親密な関係がうまく行かないことから、ワンちゃんが文化変容に成功するのはありえないということがわかる。

一方、ワンちゃんは旦那と親密な関係を作るのに失敗したが、姑の世話をするのを通し、ある意味では親族関係を作ってきた。息子が無口の原因でいつもひとり言を言っていた姑を、ワンちゃんは「きっと寂しいのだろう」と推測し、姑の寂しさを理解できた（「ワン」pp.34-35）。自分の旦那だけでなく、義理の兄の面倒も見ながら、家事や料理を励んでいるワンちゃんの姿勢を見た姑は、喜んでワンちゃんと毎日喋り、日本語を教えてあげた。同じ寂しさを感じている二人の女性は、お互いに話しの相手になった。ワンちゃんにとって、姑は旦那より親しい親族で、絆のような存在である。文化変容の面からみれば、姑はワンちゃんのソーシャルネットワークになり、日本との繋がりに擬えるだろう。この意味では、姑の世話も唯一の寄託になった。そして最後に姑の死に「幽かな痛みを感じた」彼女が涙を禁じえないのは（「ワン」p.76）、この最後の繋がりも失ってしまい、ワンちゃんの文化変容が失敗にほかならないのを示している。日本に移住しても何も得ず、残るのは前述した中国に対する繋がりにすぎない。

「金魚生活」には、金魚好きの玉玲が勤めているレストランの店長に金魚の世話を頼まれた。金魚を大事にする彼女は、夫に死別にして寂しくなり、夫の親友である周彬に世話を焼いてもらっていた。周彬は玉玲のことが気に入り、告白したことがある。玉玲は自分の気持ちを明晰に整理して

いなかったが、周彬の求愛にはっきりと答えず、彼に同棲させ、六年も曖昧な関係を続けていた。実際、玉玲の本心ではすでに感動された。たしかに、玉玲は周彬を「申し分のない男」と呼んだことがあり（「金」p. 47）、あまり周彬のことを気に入っていないように見えたが、周彬が気になる根拠がある。日本に出発する前、北京で一泊するとき、「周彬に気遣って、彼の機嫌を取ろうと懸命に振舞っている」ことと、タクシーの運転手に周彬の奥さんと間違えられても否定をしないことがある（「金」p. 55-59）。それに加えて、日本滞在中、周彬のことを思い出したことが何度もある。娘の珊珊に再婚を勧められたとき、玉玲は「再婚？そうね、考えてはいるけど」と答え、これが「周彬とのことを切り出すチャンス」だと思った（「金」p. 95）。つまり、玉玲の再婚の相手は周彬に相違ない。それから、「中国に帰っても、相変わらず金魚係をさせられるわけでしょう、安い給料だし、家に帰ったって誰かいるわけでもないし」という珊々の発言があった。そのとき、玉玲は「周彬が（いる）、と思わず声が出そうになった」（「金」p. 96）。この口外しそうになった一瞬は、周彬が玉玲の中国に帰る理由として、彼女と繋がりを育んできたことを明瞭に示しているのではないだろうか。

そのような玉玲は娘の出産のため、異国の日本に行くことにしても、日本文化に適應できるかどうかは疑問があるところである。まず、日本に到来した玉玲は、最初から日本の物事に慣れられなかった。所持金が少ないと言われたうえに、狭すぎるアパートに泊まる自分が水槽の金魚のイメージと重なったように、日本の生活が自分に合わなかったのがわかった。保険加入や税金など、日本の全く違うシステムを娘から教えてもらったことが示しているように、玉玲にとって日本はあくまで異国である。それから、玉玲はもともと日本人の相手とお見合いする気がない。来日前周彬に日本の男を注意され、飛行機で知り合った森田の虚ろな国際結婚を前轍として聞き知った上で、娘からの再婚の提案に同意するはずがなかった。しかし、「自分がこの異国の日本にいなければならないのだ」（「金」p. 115）と思った玉玲は、同時に子育てと仕事をする可哀想な娘のために、孫の面倒を見るつもりで身を落ち着けようとしたゆえ、うっかりとお見合いを受け止めた。お見合いがなかなか進めなかったが、最後のお見合いの相手は漢詩愛好者で、楽しく時間を過ごすことができた。

「すき・やき」に同じく、中国の周彬と日本のお見合いの相手をズレンマさせる設計は、玉玲がこれから日本の文化変容に成功するかどうかを象徴する。すなわち、周彬は中国を代表し、周彬を選ぶと文化変容に失敗する一方、日本の相手を選ぶと中国に帰らず、日本に生活するというわけである。しかし、「すき・やき」の曖昧な結局と違い、玉玲は周彬を選んだ。お見合いで「影を相手にお酒を飲む」と意味する李白の詩を聞けば、玉玲が脳裏に浮かんだのは「自分が周彬と向かい合い…高粱酒を飲み交わしているときの満ち足りた情景」だった（「金」p. 154）。更に、お見合いの相手にプロポーズされたとき、玉玲は周彬からもらった二十四金の指輪を不意に触った。そして、周彬を選ぶのを決意し、指輪を薬指につけ、「チューゴク、キンギョ、キンギョウ、イマス」と日本人の

相手を断った（「金」p.157）。この「キンギョ」は中国の友達や生活環境など様々な解釈があるかもしれないが、ここでは「キンギョ」は周彬への思慕を示していると解説する。もともと日本の生活と言語に慣れていない玉玲にとって、周彬を選ぶのは玉玲が日本の文化変容を諦め、中国大陸の生活に回帰したいという気持ちを示唆している。

以上をまとめると、楊の作品では、恋愛関係と家族関係は文化変容の成功を象徴させている。しかし、日本で発生する恋愛関係に順調にいかないことから、主人公の文化変容も失敗することが明らかになった。そのうえ、「ワンちゃん」と「金魚生活」が示したように、日本の恋愛の失敗を通して中国への繋がりや突出されたという点が注目すべきなのである。

4.2 移住者同士の役割

在日中国人が多いに従い、華僑会などの在日中国人向けのエスニック集団も次第に増える可能性もあるが、楊の作品では、在日中国人向けのグループは「時が滲む朝」にしか登場しなかった。描かれた中国民主同志会日本支部は、一見で中国が民主化になりたいという志を抱く団体と見えるが、実際のところ、団結していない有名無実の集団である。そしてこの集団と主人公の浩遠を対比すると、浩遠は民主同志会の会員よりさらに中国の政治状況に興味を持っていた一方、日本に対する帰属意識が弱いのが窺える。

浩遠は中国の西北部にある大学に通っているとき、民主主義を紹介され、学生運動をし始めた。学生運動の経験があった浩遠が日本へ亡命しても真剣に祖国の政治事情に関心を抱くと考えると、中国に対する帰属意識が強いと言えるだろう。学生時代から力を尽くして中国の民主化を実現させる彼は、民主同志会の懇親会に積極的に参加し、香港返還反対、中国のオリンピック開催反対などの署名運動を精一杯やり、義兄の大雄に「真面目で世間知らず」（「時」p.106）と言われるほどの愛国者なのである。

そのように純粋な愛国者は、不真面目な民主同志会の会員に不満を持つのが理解できるだろう。特別滞在ビザの申請のために同志会に参加した黄のことを「ご都合主義なヤツ」と、浩遠は不機嫌に呼んだ（「時」p.104）。そのあと、民主同志会の代表の身分を利用し、香港返還反対の署名運動を通じて香港の商社と取引し始めた袁利の行動に、浩遠は開いた口が塞がれないほど裏切られた気持ちを感じた。同志会の懇親会でも、「ビザや給料の高いアルバイトや進学先」などの現実的な質問が圧倒的に多く（「時」p.110）、時間が経つにつれ出席者数が大幅に減った。義兄の大雄が十年以上中国を離れても、「日本人であることを全く意識していない」と浩遠は判断したが（「時」p.102）、大雄は既に日本籍を持ち、「栗田大雄」という日本人の名前を取った。浩遠と考えが違い、「誰だって生活があるんだ、民主じゃなきゃ生きていけないってことよ」と言いながら黄のような浩遠が軽蔑する人を擁護した（「時」p.106）。勿論、民主同志会の力が散り散りになってしまうことによって、浩

遠の中国に対する愛着を浮き彫りにしたということになる。「革命家は孤独だ」、「曲高和寡、志が高すぎて理解する人が少ないのか」などの足掻きつづける彼はこの現状に溜息をついて茫然とすることができない（「時」p. 113, 126）。このように、民主同志会の役割は、浩遠の志を取り立てるために存在するのではない。

来日して七年、浩遠は日本に対する帰属意識が全くないとまでは言わないが、あまり高くはないと過言ではない。たしかに、彼は印刷工場の正社員に昇格しただけでなく、「日本が好きだし、別に中国籍に未練はないはずなのに」と考え込んだこともある（「時」p. 124）。しかし、これは浩遠は日本に対する帰属意識を生んだのに等しくない。なぜかという、諦めずに民主同志会の活動に手伝う彼は、周りの人が徐々に民主化に興味を失ってしまったのに撃沈されたとき、元気を出せるように詩を書いた。その詩には、日本が「時を隔てる灰色のビル群」と形容されたに対して、中国が「黄土高原を眩しく輝かせた金色／朝日に駆け巡るあの列車を溶かした血／さながら苦難が流れる黄河のようだ」と形容された（「時」p. 131）。浩遠は金色、朝日と血など情熱を表す言葉で黄土高原を形容し、自分の志も駆け巡る列車、苦難が流れる黄河と化して中国に投影した。その反面、日本は窮屈で明るくない灰色のビル群で形容された。日本にいと、「時を隔てる」ように、まるでただお金を稼いで家庭を養うまでのことで、祖国の事情を知ることができないようである。そのような浩遠は、日本人というアイデンティティーを認識することは一生も無理だろう。ここで中国人というアイデンティティーに属する意識が強く、二重アイデンティティーを取ることができず、完全に日本社会に融合し得ないことから、浩遠が文化変容に失敗することが認められるのではないだろうか。

「時が滲む朝」には、浩遠と民主同志会のメンバーの相違を明らかにしながら、日本に逃亡しても祖国の中国に向いている浩遠の愛着が顕著に現れるということは、本節で述べたとおりである。

4.3 世代の違い

第3章がまとめた通り、世代によって二重アイデンティティーに対する意識が違う場合もある。楊の作品では、主人公と子供の間には鮮明なジェネレーションギャップがある。世代の価値観の差に表したいのは、主人公が日本社会に入れない違和感である。以下では、「金魚生活」の玉玲、「時が滲む朝」の浩遠、「ワンちゃん」のワンちゃんと「老処女」の万時嬉を具体的に考察する。

玉玲の娘である珊々は大学生時代から日本に住んでいたから、玉玲との関係から見る世代の違いが最も深刻に表されている。妊婦なのに車を運転したり、出産後すぐシャワーを浴びたり、生魚を食べたりすることなど、平気に日本の習慣に従う珊々にひきかえ、玉玲は母親としての責任を意識しながら、中国のやり方に従わない娘に心配した。しかし、これは果たして母親の心配だけなのだろうか。珊々にとっては、玉玲の中国的な考えが古すぎる。「パンと牛乳で（中略）栄養失調になっ

やうよ」と戒められたところ、「母さん、今はどんな時代だと思っているの？栄養過剰ってよく聞くけど」と言い返した（「金」p. 73）。大学卒業から日本に留学した娘は、日本語を上達に話そうが、日本の企業文化を受け入れようが、日本社会に融合するのは問題がなかった。一方、玉玲は日本語が分からないうえに日本の文化も受け入れないということから、親子は正反対の価値観を持っていたと考えられる。この正反対の価値観は、玉玲が日本の生活に慣れられないことを予兆し、前掲した文化変容の失敗を前触れしておくのではないだろうか。ここで興味深いのは、正反対の価値観が同時に日中文化の相違を両極端にすることである。中国の習慣に従わないことから、珊々はある程度中国文化を放棄して日本の文化に同化した。しかし玉玲は、中国の習慣を捨てる気がなく、日本文化を拒否して「分離」という文化変容の様式を取った。つまり、玉玲の日本文化に適応できない理由は、中国の文化・習慣に深く根ざしていることである。

前節では、「時が滲む朝」の浩遠はまじめな愛国者で、民主同志会の会員との著しい対照を成したと論じてきた。以下に浩遠の愛国心についてもう一つの対照を示してみる。浩遠は「中国人」というアイデンティティを誇りにしていた。それに反して、彼の世代と違い、次代の子供は中国に対してはあまり帰属感を養っていなかった反面、小さい頃から日本に住んでいるので日本に対する愛着を沸いてくるかもしれない。浩遠の長女は日本で最も愛されている花にちなんで「桜」と名づけられた。二歳の桜が浩遠よりうまく日本語で保育園生活を話すとき、浩遠は「桜は日本人になってしまうのか、と戸惑い」を感じた（「時」p. 116）。次男の民生は、まず中国がどこかを知らず、そして「ふるさと」の意味を教えられたら「たっくんのふるさとは日本だね」と無邪気に返事した（「時」p. 150）。これらの兆しから浩遠の子供は二人とも生まれてから自分が日本社会の一員だと考え、「日本」というラベルは自分のアイデンティティに付いていると言えるだろう。フランスに亡命した同窓の白英露の息子「淡雪」でさえ、中国語の名前がありつつ中国語を話せず、中国への帰属感が弱かったと考えられる。この物語も、新世代が自分のアイデンティティに他国を含む可能性を暗示し、翻って主人公の中国にしか向かわない心を明示する。

「ワンちゃん」にも小さい親子のエピソードがある。ワンちゃんは五年ぶりに再会した息子に日本の CD プレーヤを買ってあげたが、息子に「お母さんって時代遅れだね、今時 iPod だよ iPod」、「今度帰ってくる時は何でも最新型を買ってきてくれよなあ」と CD プレーヤを返却された（「ワン」p. 53）。このエピソードを細かく味わえば、息子とのジェネレーションギャップだけでなく、四国の山村に移住した彼女は、日本のハイテクを何も知らず、日本に「生」きているが、日本社会に「活」躍していない可憐な状況を見て取れる。

「老処女」の万時嬢は子供がいないが、同様に時代遅れと言われたことがある。昔に日本人の男性にお寿司をご馳走してもらったのを代わりに、ホテルへ行って抱かせるという経験から、このような日本社会の性氾濫の観察があった：

「女には貞節は何より大切なんだ、それは新婚の初夜に旦那様にささげるものなのだ、貞節のない女は決して幸せにはなれない、と母の教えが頭の中を過ぎった。

日本人には、到底理解できない価値観なのである。日本に来て間もなく時嬉は信じがたいことながら日本人の価値観は中国人と正反対だということがわかった。二十歳にもなれば、まだ処女である、などというのはとても恥ずかしいことだというのが、日本の若い女の子の一般的な価値観である。(中略)時間が経って、やっとこれは日本人の習俗或いは文化なのである、中国人である自分は異文化の狭間に立たされて困惑しているだけだと受け止めることにした。」

(「老」 p. 128)

時嬉は日本人の性意識を「時間が経っても、結局理解できない文化」と思ったが、実はこれは言い訳にすぎない。彼女は貞節を尊ぶことを中国文化に、貞節を軽んじることを日本文化に仰々しく定めたが、そう簡単に「日本文化」に結論付けることは、時嬉がステレオタイプの罠に陥れてしまい、貞節の重視を通して日本文化を拒絶した証拠である。女の貞節は新婚の初夜に旦那様にささげるものだという考えについて、二人の母親である仲間の李蘭が

「時嬉の考え方って古すぎるんじゃないかな？……今の中国にだって、婚前同棲の恋人がかなり増えてきてるけど、……処女じゃなきゃ貰ってくれる人いないって？何を言ってるの、今は一昔まえとは違って、古い仕来りはもうどうでもよくて、愛さえあれば……」

(「老」 p. 129)

と言われた。李蘭の話は問題の本質を暴露した。いわゆる性氾濫は中国にも同じ状況があるので、日本の文化ではなく、ただ時嬉はそもそも日本社会を認識する気が進まず、自分の便宜のために得た粗末な考えにすぎない。「異文化の狭間に立たされた」ということではなく、異文化との接触を試みない証拠なのである。文化の相互理解は異文化摩擦の解決に必要であれば、逆に言うと文化理解なしには異文化に適応できないのが必然であろう。こうして日本文化を了解せずに日本で暮らしているのは時嬉の異文化適応にとって致命傷になると思われるだろう。こう考えると、結末で相手の中村先生が出来ちゃった婚で再婚するという噂を聞いて涙が流れた時嬉は、絶望と疲労を感じたかもしれないが、中村先生が婚前交渉をしてしまい、思ったとおりの紳士的な人ではないというがっかりした気持ちも原因の一つだろう。前節が論じたとおり、この実を結ばない片思いは、時嬉の文

化変容の失敗を示唆したものである。ここでは、時嬌の貴ぶ価値は時代遅れのものであるということとを文化変容の失敗の原因として補足する。

要約すれば、楊の作品では、価値観が時代に合わない主人公が多い。これは子供の考えが日本文化を表現し、主人公の考えが中国文化を示すという二つの関係を意味している。子供の価値観は日本社会に影響されたので、主人公の子供とのジェネレーションギャップは日本社会とのギャップに等しく言える。すなわち、世代の違いは主人公の文化変容の妨害になり、ジェネレーションギャップを越えないことには、日本文化に適応することができず、中国文化に根付き続けるのである。

5. 終わりに

本稿は、楊逸の文学を分析するパイロット研究として、「磚を抛げて玉を引く」のように、先生方より楊逸の文学の分析、あるいは日本語以外の言語を母語とする作家についての研究をご教示いただければと存じております。以上、本稿では、文化変容の枠組みを用い、日本に移住しても日本文化を受け入れない主人公の生活しか描かないという楊の創作特色を解明してきた。そのうえ、日本文化を受け入れない現象は恋愛の相手、中国人グループと子供との関係によって表されている。このような人間関係を通じて主人公の中国に対する定着が強いと見なされている。しかしながら、紙幅の都合上、この創作特色が楊の経歴との絡み合いについてのを考慮することができなかった。また、作品が描いている在日中国人の生活は日本社会をどのように反映しているか、などの特色を検討することには力不足である。この点を探求するために、更に楊逸の文学を研究することを今後の課題として稿を閉じたい。

文献リスト

楊逸 (2008) 「ワンちゃん」『ワンちゃん』東京：文芸春秋

楊逸 (2008) 「老処女」『ワンちゃん』東京：文芸春秋

楊逸 (2008) 『時が滲む朝』東京：文芸春秋

楊逸 (2009) 『金魚生活』東京：文芸春秋

楊逸 (2009) 『すき・やき』東京：新潮社

参考文献

- 木村真理子 (1997) 『文化変容ストレスとソーシャルサポート——多文化社会カナダの日系女性たち』 東京：東海大学出版会 国籍（出身地）別外国人登録者数の推移
- 黒木雅子 (1996) 『異文化論への招待』 朱鷺書房
- Shiun, Candy Lai Yung (2003) 「異文化への対応と適応」 『日本学刊』 第7号, 106-108 頁
- 人民網日本語版(2009) 『芥川賞作家、楊逸さんインタビュー(2)』
http://j.peopledaily.com.cn/2008/07/23/jp20080723_91646.html
- ネウストプニー、J. V. (1982) 『外国人のコミュニケーション』 岩波新書
- 法務省(2009) 『国籍(出身地)別外国人登録者数の推移』
<http://www.moj.go.jp/content/000049970.pdf>
- 村井隆之 (1995) 「異文化アシミレーションとカルチャー・シミュレーション」 『国際文化学研究：神戸大学国際文化学部紀要』 第5号, 29-56 頁
- Berry, J. W. (1970). Marginality, stress, and ethnic identification in an acculturated Aboriginal community. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 1*, 239-252.
- Brien, M. & David, K. H. (1971). Intercultural communication and the adjustment of the sojourner. *Psychological Bulletin, 76*, 215-230.
- Gallo, F. (1982). The effects of social support network on the health of the elderly. *Social Work in Health Care, 8*(2), 65-74.
- Kim, B.-L.C. (1978). *The Asian Americans: Changing patterns, changing needs*. Montclair, NJ: Association of Korean Christian Scholars in North America, Inc.
- Phinney, Jean S. (2003). Ethnic Identity and Acculturation. In Kevin M. Chun, Pamela Balls Organista, Gerardo Marin (eds.) *Acculturation: Advances in Theory, Measurement, and Applied Research* (pp. 63-83). Washington: American Psychological Association.
- Redfield, R., Linton, R. & Herskovits, M.J. (1936). Memorandum on the study of acculturation. *American Anthropologist, 38*, 149-152.
- Social Science Research Council Summer Seminar. (1954). Acculturation: An exploratory formulation. *American Anthropologist, 56*, 973-1002.
- Walker, K. N., Macbridge, A. & Vachon, M. L. S. (1977). Social support networks and the crisis of bereavement. *Social Science and Medicine, 11*, 35-41.